

波と風



独立行政法人国立病院機構

呉医療センター・中国がんセンター

〒737-0023 広島県呉市青山町3-1 TEL0823-22-3111 (夜間・休日 TEL23-1020)
http://www.kure-nh.go.jp 発行責任者 呉医療センター院長 谷山 清己

2017
JANUARY

vol.38



呉医療センター・中国がんセンター 理念

Basic Principle of Our Hospital

相手の心情に寄り添う愛のある医療を
笑顔で実践します

*Practice medicine from the heart,
create smiles every day*

運営方針

Management Policy of Our Hospital

LOVE and SMILES

- Live healthy 健康な人生を応援します
- Own your personal health 疾病予防を支援します
- Value an amiable, cordial atmosphere いかなる暴言・暴力も許しません
- Ensure effective medical services 安心・安全で効果的な医療を目指します
- Accelerate good work practices 働きやすい職場環境を促進します
- Nurture quality hospital management 健全な病院運営をします
- Demonstrate partnership with local medical services 地域医療と緊密に連携します
- Secure safety first 安全を最優先します
- Minimize adverse events 副作用や合併症を最小限にします
- Invest in staff education 優秀で国際的な医療者を育成します
- Lead in life expectancy results 人命を尊重します
- Engage and care for patients 相手の心情に寄り添います
- Surpass expectations チーム医療をおこないます

CONTENTS

- P.2～6 新年の挨拶
- P.7 診療科紹介 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
- P.8 診療科紹介 心臓血管外科紹介
- P.9 診療科紹介 乳腺外科の紹介
- P.10 職場紹介 地域医療連携室紹介
- P.11 職場紹介 薬剤部の紹介
- P.12 職場紹介 10A(緩和ケア)病棟
- P.13 職場紹介 看護部長室の紹介
- P.14 ストーマ外来の紹介
- P.15 「第一回地域医療連携のつどい」開催
- P.16～17 呉医療センター・中国がんセンター創立60周年記念事業
- P.18～19 2016年メディカルフェスタを終えて
- P.20 「第3回日本と韓国の医学交流を考える会」が開催されました
- P.21 第70回国立病院総合医学会に参加して
- P.22 接遇研修に参加して
- P.23 ～クリスマス・イルミネーション点灯式を開催～
- P.24 医療機器安全ニュース
- P.25 うちの部署の接遇キラリさん
- P.26 第5期のモデルナースを紹介します。
- P.27 「秋のオープンスクールを終えて」
- P.27 「メディカルフェスタを終えて」
- P.27 「戴帽式を終えて」
- P.28 病診連携 医療法人社団 生康会 谷本医院
- P.28 編集後記



賀 正 “LOVE and SMILES”を添えて



院 長 谷 山 清 己

新年あけましておめでとうございます。

2017年の干支は酉年です。正確に言うと丁酉（ひのととり）になるそうです。酉は鶏（にわとり）を意味していて、鶏は人に時を報せます。また、酉の干支の特徴は“親切で世話好き”とのことです。さらに調べると、十二支に基づくご本尊が八体あって、仏教的信仰の対象となっています。酉年生まれの守り本尊は“不動明王”です。不動明王は、五大明王の一つで、大日如来（だいにちにょらい）の化身とも言われ、大火炎の中に座し、剣と縄を持っています。悪行に打ち勝つため、怒りの相をしています。この様な酉年の特徴を私たちの医療界に当てはめると、次に示す関係が思いあたります。

- 1) 時を知る = 生命や死の時を知る。
- 2) 親切で世話好き = 相手の心情に寄り添う愛のある医療を笑顔で実践します。
- 3) 悪行に打ち勝つ = 悪癖に打ち勝ち健康に過ごす、または、災害時に果敢な行動をとる。

「時を知る」では、医療者が患者さんと家族に“その時”を知らせる場面が思い浮かびます。医療者は、患者さんと家族より、患者さん自身の医療情報を多く知り、また、専門的に情報を解析する技術と見識を有しているので、患者さんに関する“その時”をかなり具体的に予測することができます。“生命誕生”、“成長”、“快癒”、“根治”などの“希望”につながる出来事は“明るく”感じることであり、患者さんと家族のみならず医療者にとっても喜びにつながる場面です。この場合、“その時”を予測することは、すべての関係者の楽しみの一つです。他方、“死”、“老化”、“悪化”、“不治”などの状況は“暗く”感じる出来事であり、時に“痛み”や“絶望”につながります。患者さんと家族のみならず医療関係者にとってもできれば避けたい場面です。しかし医療現場は、“明るい”出来事と“暗い”出来事が混在しています。また、“希望”につながるはずであった処置が、合併症によって“辛い”現実には急遽直面する場合もあります。当センターは、「安心・安全で理にかなう医療」をチーム医療として遂行する目標を立てています。一方、当センターに救急車で搬送された患者さんが、すでに最新の医療をもってしても救うことがかなわず、2－3週後あるいは数カ月以内に“その時”が来ることが予測される場合もあります。当センター医療者は、できうる範囲で“その時”を予測し、患者さんと家族へ知らせます。“明るい”状況も“暗い”状況も、われわれ医療者は最善を尽くします。“明るい”が“暗い”に反転しないように、そして、“暗い”が少しでも“明るく”なるように、です。患者さんと家族は、“その時”を医療者から知らされたら、『心の準備』をしてください。“明るい”予測であっても、万が一の事態が生じることが絶対にないわけではないことが医療の現実です。最も“暗い”予測である“不治”や“死”も避けて通れません。当センター

には「Living Will」というシステムがあります。すべての人にいつかは訪れる“死”を迎えるにあたって“最新の医療”が及ばない“その時”をどのように過ごしたいかをあらかじめ考え、本人の最後を生きる（Living）意志（Will）を医療者に伝えるシステムです。患者さんと家族の皆さんで、常日頃の“明るい”時から考えるようにしてください。

「親切で世話好き」に対応する「相手の心情に寄り添う愛のある医療を笑顔で実践します」は当センター医療の“理念”です。いろいろな疾病を持つ患者さんにはそれぞれに固有の考え、家庭事情、社会的背景などがあります。当センター医療者は、チーム医療として「安心・安全で理にかなう医療」を遂行することにより患者さんの疾病治癒を目指します。同時に、患者さんそれぞれの固有事情に注意を払い、患者さんの心情を思い、“愛”の心をもって寄り添うように医療をおこなう目標を立てています。その際に笑顔を決やさぬように心掛けています。相手の心情を思いながら笑顔で接するという意味を表す“和顔愛語”という言葉は、当センター医療の運営方針をまとめたキーワード“LOVE and SMILES”の日本語訳となっています。

「悪行に打ち勝つ」において、「悪癖に打ち勝ち健康に過ごす」ために、『五つの健康習慣を実践する』ことが大切です。それは、1) 禁煙する、2) 食生活を（正しく）見直す、3) 適正体重を維持する、4) 身体を（適切に）動かす、5) 節酒する、です。一つでも多くを実践することで、そうでない状態よりも“がんになる危険性”が低くなります。この中で特に重要なのが、“禁煙”です。日本人男性においては、“がんになる要因”の約30%は“喫煙”であると報告されています。食生活、体重、運動、節酒の前に、タバコを吸う人は“禁煙”することが第一に重要です。タバコの煙も発がん性があります。タバコを吸う人だけでなく、周囲の人を“発がん”の危険性にさらしています。若い人ほど細胞の活動が盛んなのでたばこによる発がんの危険性は高くなります。小さな子供の前で親がタバコを吸うことは絶対あってはならない行為です。タバコを吸う人の多くが実は“禁煙”したいと思っています。だけどやめられないのは、その人の心が弱いのではなく、“タバコ中毒”という病気だからです。“喫煙者”は、今年こそ“禁煙”しましょう。そのために、「禁煙外来」を訪れて治療を受けてください。

「災害は忘れたころにやってくる」と昔からよく言われていました。でも今は、「忘れる前にやってくる」という感があるほど、頻繁です。私たちの地域も常に備えなければなりません。当センターは災害拠点医療施設です。国、県、市などの行政と連携し、大規模災害への対策をしっかりと考えていきます。

皆さんと共にあり、皆さんの健康を支え、そして皆さんから支えられる当センターを今年もよろしく願いいたします。



新年のご挨拶

副院長 森 脇 克 行

明けましておめでとうございます。

本年の十二支は酉です。トリ年は鶏（ニワトリ）のイメージが定着していますが、漢字の“酉”は本来“ちぢむ”ことを意味し、果実が成熟の極限に達した状態を表しているのだそうです。“果実の成熟の極限”とは、干しぶどうやナツメのような果実のイメージでしょうか。

成熟と言えば、わが国は21世紀に入って「成長社会」から「成熟社会」に移行したと言われています。「成長社会」は、若い人口を背景に物質的豊かさを追い求めた大量消費を特徴とする社会で、映画“ALWAYS三丁目の夕日”のような20世紀の経済成長期の社会です。一方、1972年にノーベル賞物理学者のガポールが提唱した「成熟社会」とは、“経済成長や大量消費社会のかわりに高水準の物質文明を維持しながら、精神的な豊かさや生活の質の向



今年の抱負

副院長 中 野 喜 久 雄

皆さん、新年明けましておめでとうございます。

今年も宜しく願います。

去年は当院で初めて地域医療連携のつどいを開催しました。第一回目であり、少し盛大となりましたが、今年は無理がなく長続きするような「つどいの会」にしたいと思っています。また昨年、退院支援強化策をパイロット病棟で試行した結果、課題とその方策が分かってきました。今年は、それを基に退院支援強化策を全病棟に広げて実施し、最終的には良質な医療を提供するためのPatient Flow Managementの確立を目指して努力しようと思います。これに関連して入院診療計画書も見直しました。医療従事者には、それを使って患者家族が十分に納得で

上を重視する平和で自由な社会”です。しかし、我が国の成長社会後の現実には、少子高齢化、地方の過疎化、財政赤字、社会保障費問題など多くの難問を抱え、価値観の多様化、社会の複雑化、情報テクノロジーの急速な進歩など、さまざまな変化や困難に直面しています。だからといって、成長社会の単純な夢の時代には後戻りではできません。ここは一つ、成熟した人口を背景に、精神的、文化的な成熟を大切にして、長い経験から得られた知恵を絞って、ガポールの理想的「成熟社会」を目指すべきだと思われます。

さて、呉医療センター・中国がんセンターは、今年国立病院として創立後61年を数えます。去年は創立60周年の節目の年を祝いました。病院も成熟の時期を迎えたといつてよいかもしれません。今年も、私たちの病院が長年蓄え培ってきた良質な医療をさらに発展させ、市民の皆さんや地域の医療・介護施設、行政と共に歩む、実り多い年でありたいと思います。

みなさまにとって、本年が豊かで実り多い酉年となりますよう心からお祈り申し上げます。

きる説明を是非お願いしたいと思います。

地域の先生方と当院の職員との間には、未だ誤解やわかまりがあるように思います。職員、ひとり一人が相手の気持ちを考えて、言葉一つに気を配って対応して頂くことをお願いします。さらに地域医療連携室職員も地域とのより良い関係を作りながら、All Kureで取り組むべき具体的な地域連携策を作成していく予定です。

今年2月に病院機能評価を迎えますので準備が大変だと思っています。その評価の合格点を得ることも大切ですが、当然、これが目的ではありません。評価を受けることをきっかけにして、常に良質な医療を提供するための心構えの再認識と実践が大事だと思っています。

以上、色々と目標や願いを述べましたが、本年は酉年です。酉という漢字は酒つぼを描いたもので、収穫した作物から酒を抽出するという意味や、収穫できる状態であることから「実る」という意味もあります。今年も皆さんが協力してチーム一丸となり、成熟した果実を収穫できる年にしていきたいと思います。



新年のご挨拶

統括診療部長 下瀬 省二

新年明けましておめでとうございます。穏やかな新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

皆様にとって、昨年はどんな年だったでしょうか。私にとっては、痛みについて再発見した年でした。昨年8月中旬に、特に前ぶれもなく右膝痛が出現しました。膝関節の痛みは、私の専門領域である整形外科で治療する疾患にもかかわらず、なかなか治すことができず苦労しました。変形性膝関節症は、関節軟骨がすり減ることで生じ、動きはじめの痛みを特徴とする疾患です。O脚の場合、内側から軟骨がすり減るため、膝の内側に痛みを感じます。しかし、日常診療においては、O脚でもしばしば、「膝の裏が痛い」とか、「外側が痛い」という声を聞きます。不思議に思っていましたが、今回、自分も膝の裏側や外側が痛くなることを経験しました。どうしてそこが痛くなるのかよくわかりませんが、少なくとも、患者さんの痛みに対して、以前より共感できるようになったと思います。そういった意味では、特にそれ以降の診療において、「相手の心情に寄り添う愛のある医療を笑顔で実践します」という病院の理念を実践できたのではないかと考えています。

さて、本年は「病院機能評価」の更新審査を受ける年です。病院機能評価は、日本医療機能評価機構が、病院

組織全体の運営管理および提供する医療について、「患者中心の医療の推進」「良質な医療の実践1」「良質な医療の実践2」「理念達成に向けた組織運営」の4つの項目を評価するものです。当センターでは、平成27年の年末に現状の評価と課題の抽出を行い、それぞれの部署で1年をかけて、課題の解決や業務手順、マニュアル等の確認・修正を行ってきました。いよいよ、本年2月16日(木)、17日(金)に受審となりましたので、最後にもうひと押しお願い致します。

また、「臨床評価指標を用いたPDCAサイクルに基づく医療の質の改善」も次の段階に入ります。昨年は、当センターの課題のひとつとして、「人工関節手術施行患者における抗菌薬3日以内中止率」について、plan（計画）、do（実行）、check（評価）、act（改善）のサイクルを用いて医療の質の改善を試みました。国立病院機構の臨床評価指標においては、人工関節手術施行患者における抗菌薬3日以内中止率の目標値は90%ですが、当センターにおいては、2015年度は66.7%と未達成でした。これらのデータを詳細に検討し、PDCAサイクルを用いて改善することで、2016年4月～10月においては、97.7%と目標をクリアしました。また、他の多くの項目に対しても各部門で取り組んでいただき、改善を認めました。今年度は、また、新たな項目に取り組んでいきますので、ご協力を宜しくお願い致します。

昨年10月には、当センターが国立病院となって60年の節目が過ぎ、新たな10年のスタートをきりました。本年は、その最初の1年となります。いろいろなことに新たな気持ちで取り組んでいきたいと思います。ご協力をよろしくお願い申し上げます。

でサルコペニア肥満が増加していることを指摘されています。サルコペニアに肥満が加わった状態をサルコペニア肥満といい、筋肉の量も質も落ちた上に、成人病の悪化だけでなく体脂肪による体重増加で膝や腰が悲鳴を上げます。それにより高齢化率の高い呉市においても深刻な要介護人口が増加しているのです。

サルコペニア肥満を予防するために唯一推奨される必須の方法があります。「食べて動く」がキーワードで、そうすることにより高齢者の自立を促す必要があります。それを支える若い力には限界があり、呉地域全体で高齢者の幸せを考え取り組んでいく必要があります。

そうはいうものの、おいしいものとお酒には目がないので、週に2回のジム通いが私の一年の計です。皆様にとりまして、安全、安心な穏やかな1年になりますようお祈り申し上げます。



謹んで新年のお慶びを申し上げます。

看護部長 鳴田 保美

平成28年で印象に残っていることとして、4月14日に発生した「熊本地震」は衝撃的でした。また一方8月には、「リオ五輪」が開催されたことや「ポケモンGO」の配信や25年ぶり広島が7度目のリーグ優勝を果たしたことなど嬉しい出来事もありました。

医療現場においては、診療報酬が改定し、入院基本料要件である重症度、医療・看護必要度が15%から25%以上に引き上げられ、看護部として、正しい評価の実施やシステムの構築が求められました。また認知症ケア加算が新設されたことを受けて、全病棟に認知症ケア研修履修者の配置をしてきました。さらに人材育成・確保対策の一環として、院外や院内の看護学生に実習しやすい環境づくりを実践していく為の専任実習指導者を育成中です。確実に少子高齢化の進展により、医療・看護は病院から地域・在宅へと向かっています。看護職は、急性期から在宅に至るまで専門性に基づき適切な判断や対応が



新年のご挨拶

薬剤部長 二五田 基文

新年明けましておめでとうございます。

今年は、当院にとって病院機能評価の受審、電子カルテのシステム更新等大きなイベントが多々控えており、例年にも増して重要な1年となりそうな状況にあります。院内全体で情報を共有し、確実な対応を心がけていきたいと思います。医療安全におけるインシデント事例を見てもわかるとおり、多忙な時こそ、慎重かつ確実な対応が求められます。

近年、非常に高額な新薬が発売され、医療財政制度が

できる人材育成が重要となっています。

今年の2月16、17日には病院機能評価受審があります。病院機能評価の受審の目的は、「組織横断的・継続的な改善活動を実施していく過程で、組織の活性化、職員の自覚や改善意欲の醸成などの意識向上が図られること」です。

受審後は、提供する医療サービスの質が向上し、安全で安心な医療の提供の実現を目指していきたいと考えます。

今後ともご助言やご指導のほどよろしくお願い申し上げます。



今年の干支である酉年。酉年の「にわとり」は明け方に鳴く鳥です。新年も一番に鳴く鳥のため縁起が良いとされています。

崩壊するのではないかと社会的にも大きく取り上げられていますが、そういった意味においても医療界のエコとも言われている後発医薬品の採用を継続して推進していく必要があると考えています。後発品の採用において、これまでは数量ベースに着目して切り替えを進めてきましたが、本年からは金額ベースにも着目して、数量は少なくとも高額な医薬品を中心に後発品への切り替えを検討していきたいと考えています。「良い医療」を提供するためには、「健全な経営」なくしては成り立たないため、院内における無駄なコスト削減にも積極的に貢献していきたいと考えています。後発品への切り替えにあたっては、できる限り現場の混乱が起らないように配慮し、円滑な運用を心がけたいと思います。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。



年頭にあたって

事務部長 植木 直富

皆様、新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願い申し上げます。

2017年、今年も色々取り組むべきことの多い一年になりそうです。まず手始めは2月の病院機能評価の受審です。「患者の視点に立った、良質な医療の実践」を評価することが明確にされ、「患者さんが医療を受ける流れに即した評価」、「良質な医療が行われているかといった視点での評価」が行われます。どのような視点で見られようとも、認定が受けられるようしっかりと取り組んでいきたいと思っています。



「新年のご挨拶」

看護学校 副学校長
三島 真由美

謹んで、新春のおよろこびを申し上げます。

旧年中は、大変お世話になりありがとうございました。本年もよろしくお願いします。

学校は、新年を迎えてから春までに、入学試験、看護師国家試験、卒業式、入学式と続き多忙な日々が続きます。寒さが少しづつ和らぎ早春の花や生き物たちに癒やされながら頑張っていきます。

少子・高齢化の時代を迎えて久しく、ますます実感する毎日です。少子・高齢化の時代ですから…という理由は、もう通りません。

少しでも、その影響を緩和させる手立てを実行に移さなければならないと考えています。

さて、昨年来、日本に限らず世界中で猫ブームだそうです。その猫が干支にいないことは、いくつかの民話に残されています。猫が鼠にだまされて、神様が出した集

そしてもう一つ、何といても電子カルテを含む医療情報システムの更新があります。現在のシステムはシンクライアントによる仮想化と、ICカードによる運用により非常にセキュリティの高いシステムです。当院はこれまでこの分野においては先進的な取り組みをしてきました。今後、医療環境が益々厳しくなっていくことが予想されるなか、今回の更新にあたってもしっかりと取り組んでいきたいと思っています。

今年の干支（えと）は正確には「丁酉」だそうです。干支とは10種類からなる「十干」と12種類からなる「十二支」の組み合わせで60通りの干支があり、60年で一周するため60歳を還暦というそうです。「丁酉」の年は「挑戦してきた事の結果・果実を勝ち取る」年だそうです。良い結果を勝ち取れるよう、常に前を向いて進んでいきたいと思っています。皆様よろしくお願いいたします。

合時間に遅れ13番目に到着したために番外となり、それ以来、猫は鼠を追いかけるようになったといわれています。

毎日、猫に追いかける鼠のように、何かに追われながら仕事をしていますが、慌ただしさの中では何を忘れたか、何を落としたかわからなくなることがあります。そして、宝物も見つけることはできないでしょう。某アニメのように鼠が猫を追いかけるように、時には逆転の発想で、新しい取り組みができるようにしたいと思います。



診療科

紹介



耳鼻咽喉科・頭頸部外科

耳鼻咽喉科・頭頸部外科科長 立川 隆治

耳鼻咽喉科・頭頸部外科は耳鼻咽喉科と頭頸部外科の2つの部門からなります。いずれの部門も領域が広く扱う疾患も炎症性疾患、腫瘍、外傷、先天性疾患、加齢性変化など多岐にわたるため耳鼻咽喉科と頭頸部外科が分かれている施設もありますが、診療に従事する医師数の都合で当院ではスタッフ3名とレジデント1名の4名が耳鼻咽喉科と頭頸部外科の両方も部門の診療を行っています。耳鼻咽喉科では文字通り耳、鼻、のど（咽と喉）の上述の様々な疾患を扱い検査ならびに薬物療法を中心とした治療を行う部門で、頭頸部外科は脳、脊髄・脊椎、眼を除く頭部～頸部におけるすべての手術を行う部門です。

当科の特色としては耳鼻咽喉科領域では高気圧酸素治療を用いた突発性難聴ならびに顔面神経麻痺に対する治療を積極的に行っていることです。当院の高気圧治療室は最大14人の収容ができる全国でも最大級の第2種装置であり定員による治療制限を行うことなく他施設より多くの回数が施行できます。平成27年度は突発性難聴180例（2029回）、顔面神経麻痺59例（635回）の治療を行いました。

また睡眠時無呼吸外来を昨年度より開設し現在は水曜日の午前ならびに木曜日の午後に、鼾や睡眠中の呼吸障害に伴う睡眠障害の検査・治療を行っています。検査は外来でアプノモニターという簡易装置を貸し出して自宅で行う睡眠時無呼吸症候群の有無やおおよその重症度を知るためのスクリーニング検査や入院して脳波や心拍・呼吸監視装置を装着した状態で睡眠時無呼吸症候群の重症度や治療効果をみるための終夜睡眠ポリグラフィー検査という検査を行っています。治療は投薬による治療、手術、N-CPAP（ネーザールシーパップ）という鼻から空気を流す装置を用いた治療、口腔内装置（マウスピース）を用いた治療など多様な治療を重症度や年齢に応じて治療を行っています。

また、当科の頭頸部外科領域の特色は頭頸部腫瘍に対する手術を拡大手術から縮小手術まで幅広く行っていることです。

拡大手術では負担軽減のため手術時間の短縮に努め外科、形成外科の協力を得て、全国でもトップレベルでの

手術時間で手術を行い治療成績も良好です。

頭頸部癌の手術後の治療も術後治療を要する進行癌に対しては当院のIMRTという放射線治療装置を用いた放射線治療を中心により低侵襲で副作用の少ない術後治療を行っています。

また内視鏡下鼻・副鼻腔手術を原則局所麻酔で施行しているのも当科の特徴です。近年では内視鏡下鼻・副鼻腔手術は手術時間が数時間と長くなるため全国的に全身麻酔下で施行する傾向があり県内でも主に局所麻酔で内視鏡下鼻・副鼻腔手術を行っている施設は他にありません。当科では消化管の内視鏡検査などに使用されている薬物による沈静を併用し短時間で手術を行うことにより局所麻酔での手術が可能で、原則局所麻酔での手術としています。

今後も耳鼻咽喉科領域、頭頸部外科領域の低侵襲で質の高い治療法も目指し安定した医療を目指したいと思っています。



PSG 検査風景



CPAP (S9)



診療科 紹介



心臓血管外科紹介

心臓血管外科 科長 高崎 泰一

当院の心臓血管外科の特徴は循環器内科との協力により「呉心臓センター」（図1）を開設しており、お蔭様で地域の多くの循環器疾患の患者さんを手がける機会に恵まれています。当科は年間手術約170例、うち心臓、大血管手術は約80例と呉地区で最も多い心臓手術を取り扱っています。また、現時点では呉地域にて緊急での心臓手術が可能な施設は当院のみであります。その中で常に心がけていることは、「個々の患者さんに適した手術」です。呉地区は高齢者が多いため、当科では、心臓手術が負担となり術後QOLを損なわない術式を個々の患者さんに合わせて行うことを、一貫した基本方針としています。中でも力を入れているのは1) 大動脈瘤に対する血管内治療（ステントグラフト治療） 2) 低侵襲手術（MICS） 3) OP-CAB（オプキャブ） 4) 心房細動に対する手術 の4つです。

図1 呉心臓センター



ステントグラフト治療では、年齢や全身状態、動脈瘤の形態、合併症の頻度、従来手術との利点欠点を総合的に判断し、腹部大動脈瘤、胸部大動脈瘤に対して治療を行っております。ハイリスクな患者さんには、開胸手術が負担となり術後合併症の可能性も大きくなるため、本術式に対する需要は今後も増してくると考えます。症例によっては難しいケースもありますが、その場合は他施設に支援していただき、これまで良好な成績を収めており、約1週間～10日で退院していただいております（図2）。2015年には89歳の方にTEVARを行いました、幸い合併症もなく10日で独歩自宅退院されております。従来の手術法ではとうてい考えられない経過であります。

図2

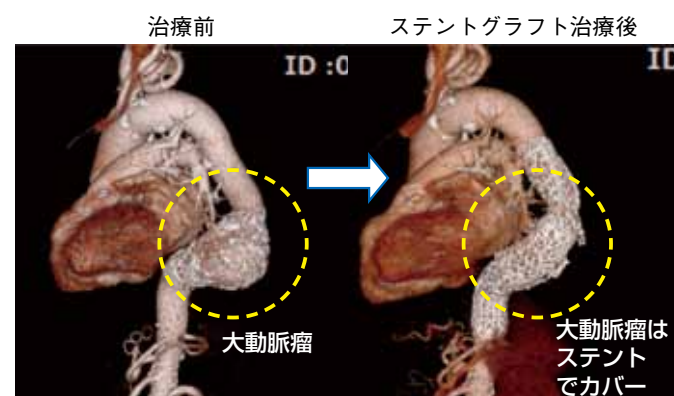


図3



OP-CAB（オプキャブ）とは、冠動脈バイパス術の1つの方法なのですが、人工心肺装置を用いずに、心拍動下に冠動脈をバイパスする手術です。なので低侵襲にもつながります。なぜなら人工心肺に伴うデメリットが無くなる分、患者さんにかかる負担は軽減されるからです。成績向上につながるように、両側内胸動脈を使用することを優先します。2012年に天皇陛下が受けられた手術です。

弁膜症に合併した心房細動は脳梗塞の大きなリスクですが、これに対してはラジオ波による外科的アブレーション（メイズ手術）を積極的に施行しており、心房細動治療率も90%以上と良好な成績です。メイズ手術において全国的にも高名な広島大学第一外科 末田教授からの直接の指導をいただいて、同様の術式を継承しております。

心臓手術を受けられる患者さんは非常に大きな決心をして来られ、術後も不安が大きいものです。私たちは、命を預けていただいた患者さんに敬意を表するとともに、その不安を支える心のケアも大切に、一日でも早く日常生活を取り戻せるようにしています。

当科の診療には循環器内科やコメディカルの協力が非常に大きく、温かく支えていただき日々の診療が可能となっています。呉地区の心疾患の患者さんを一人でも多く救うため日夜奮闘しています。これからも呉心臓センター、心臓血管外科へご指導をよろしくお願いします。

診療科 紹介



乳腺外科の紹介

乳腺外科科長 尾崎 慎治

当科は呉地域および周辺地域の乳腺疾患の診療を担当しています。乳腺疾患のなかでも近年増加傾向にある乳癌に関してはそれぞれの専門領域の科（放射線診断科、病理診断科、腫瘍内科、放射線治療科、形成外科）と密に連携し、専門的な診断と治療を実践しています。

<乳腺外科スタッフ>

乳腺外科 科長 尾崎慎治
乳腺外科 医長 重松英朗
乳腺外科 医師（非常勤） 安井大介

<診療活動>

乳癌検診や地域の医療機関で乳腺の精密検査が必要と診断された患者さんの診療を担当しています。乳房のしこりや痛みがある患者さんについては、紹介状がなくても出来るだけ受診された当日に診察しています。本年度からデジタルマンモグラフィーおよびステレオガイド下での組織生検装置が導入されます。これに伴い、より早期の段階での乳癌の診断が可能になります。

・外来診療：

乳腺外科専門のスタッフ3人で週4日の外来診療を行っています。平成27年度から外来診療の効率化と診察までの待ち時間の短縮のため、近隣施設との病診連携を行っています。

・手術：

主に乳腺外科専門医2人で週3～5件の全身麻酔下、局所麻酔下の手術を行っています。また、乳房切除が必要な乳癌の患者さんで乳房再建を希望される方に関しては、形成外科専門医と合同で乳房再建を行っています。

<診療実績>

病診連携を推進した結果、外来診察の人数は1日平均30人前後で落ち着いており、待ち時間が1時間を超えることは少なくなりました。原発性乳癌の手術は年々増加傾向にあり、平成28年度は160例以上（両側乳癌を含む。）の手術を行いました（図1）。また、当院は乳腺外科専門医、形成外科専門医が常勤しており、年間10例以上の一期的な乳房再建を実施しています。呉地域で唯一、乳房再建用エキスパンダー、インプラント実施施設の認定を受けており、近隣施設からの紹介も徐々に増えています。

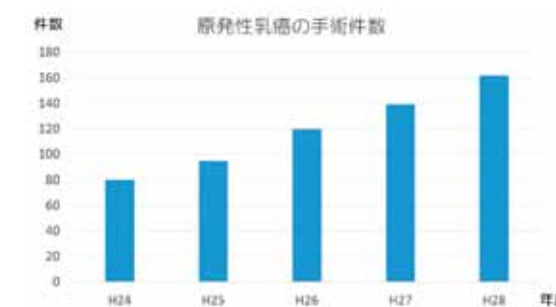


図1

<合同カンファレンス>

乳腺疾患の治療方針を決定するためにそれぞれの専門領域の診療科とのカンファレンスを毎週行っています。

・乳腺外科カンファレンス：

乳腺外科担当医3名でカンファレンスを行い、乳癌患者さんの初期治療（根治を目指した治療）の方針決定や手術方法について検討しています。

・薬物療法カンファレンス：図2

多職種（腫瘍内科医、乳腺外科医、がん専門薬剤師、がん認定看護師、臨床心理士）によるカンファレンスで薬物療法を受けられている乳癌患者さん一人ひとりの身体的・精神的な状況の確認を行っています。また、再発患者さんに関しては、それぞれの患者さんに適した薬物療法をカンファレンス内で検討し、安全かつ有効な治療を受けて頂いています。



図2

・病理カンファレンス：

乳腺疾患の正確な診断と適切な治療を決定するため、病理専門医とのカンファレンスを行っています。

<病理外来と乳癌カウンセリング>

当院独自の試みとして、乳腺疾患の病理診断の説明を病理専門医が担当する病理外来を開設しており、乳癌カウンセリングと同時に行うことで患者さんの病理診断と治療への理解に寄与しています。

職場紹介

地域医療連携室紹介

地域医療連携副室長 森 下 早 苗



地域医療連携室は、中野地域医療連携部長、清水地域医療連携室長をはじめ、看護師4名、事務職員6名、MSW8名体制です。患者さんの紹介・診療検査予約、波風ネットといった「診療連携」、「地域医療連携パスのデータ管理」、「退院支援」、「がん相談」、「広報」といった様々な機能をもっています。



図1 地域医療連携室 スタッフ写真

【診療連携について】

呉医療圏では当院とかかりつけ医が連携して、患者さんを長期にわたりケアしています。そのため、再発を予防する慢性期治療はかかりつけ医が、入院治療は当院が担っています。当院の地域医療連携室は平成16年から開設され、13年目を迎えています。開設当初から「顔の見える病診連携、病病連携を目指す」ことを基本方針とし、現在も継続しています。地域医療連携室は、急性期病院の窓口として患者さんやかかりつけ医からの様々な相談を受けています。重症患者さんやがん治療が必要な患者さんは当院に紹介されます。平成27年度は、延べ17,967名の患者さんの紹介があり、治療しています。また、平成23年より「波と風ネット」を稼働しています。これは、同意が得られた患者さんの医療情報をかかりつけ医と共有し、患者さんご家族に「安心」を提供するシステムです。「波と風ネット」の加入施設は平成27年度で45施設（医療機関、調剤薬局）となり、同意患者総数は4460名となりました。今年度は、かかりつけ医との連携強化をするため、「第1回 地域医療連携のつどい」を開催し、多くの地域の先生方と意見交換を行いました。今後も地域の医療機関の皆様方との密な連携を保ちながら、安心・安全で理にかなう医療を行っていききたいと思います。



図2 第1回 地域医療連携のつどい

【相談支援・退院支援】

平成27年度の延べ相談件数は11,041件でした。相談内容は、退院援助が全体の70%を占めています。患者さんやご家族からの療養上の様々な相談内容に対応しています。呉市は、15万人以上の人口規模の市としては全国一位の高齢化率となっています。医療と介護が必要となった患者さんが、住み慣れた地域でその人らしく生活できるような支援を目指して取り組んでいます。地域の医療施設等との連携を強化し、地域医療連携室が当院と地域を結ぶ架け橋となれるように取り組んでいきたいと考えています。

【がん相談】

当院は呉地域のがん診療拠点病院として、がん相談支援職員を配置し、様々ながん相談にも応じています。平成27年度のがん相談件数は2017件でした。相談者の内訳は、約6割がご家族で、3割が患者さんご本人からの相談でした。相談内容としては、「症状・副作用・後遺症」や「食事・栄養」に関するものが多くありました。がん患者さんや家族の方の不安や悩みを少しでも和らげることができるよう、患者さんが集い情報交換を行う「がんサロン」「乳がんサロン」「オストメイトサロン」なども定期的に行っています。専門医からの講義を聞くことで疾患や治療に対する理解が深まった、患者さん同士で悩みの共有ができ、励みになったとの意見も聞かれています。今後も、相談者の言葉に耳を傾け、相談者が次の一歩を踏み出せるような支援を目指していききたいと思います。

職場紹介

薬剤部の紹介

薬剤部長 二 五 田 基 文



1) 薬剤部の理念・基本方針

(理念)心のこもった、わかりやすい薬剤業務

(基本方針)○専門知識と倫理観をもって薬物療法の提供に努めます

○常にくすりのリスクを予見し、安全な管理に努めます

○職能を活かしチーム医療の推進に努めます

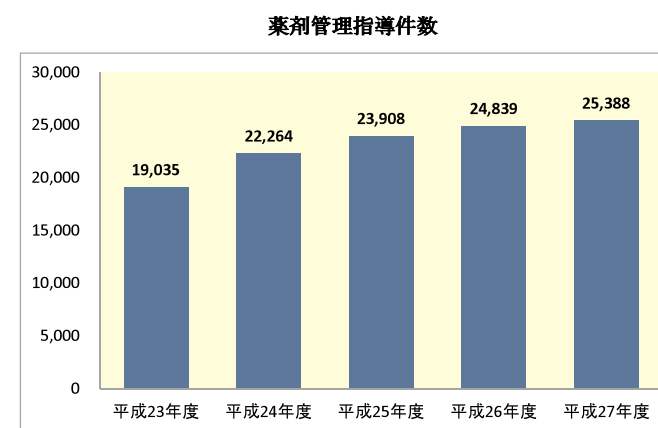
○地域医療の発展に努めます

○自己啓発と教育に努めます

○円満な人間関係と明るい職場作りに努めます

2) 薬剤部の業務内容

薬剤部は薬剤師38名(定員40名)、薬剤助手8名のスタッフで、医師・看護師・その他の医療スタッフと協働して、調剤、製剤、薬剤管理指導、医薬品情報管理、持参薬鑑別、リスクマネジメント、薬物血中濃度解析、治験等の受託研究、臨床研究等に専門的に取り組んでいます。特に、平成24年度の診療報酬改定で新設された病棟薬剤業務実施加算の施設基準を当初よりクリアし、対象病棟全てに薬剤師が常駐し、医療スタッフの業務負担軽減並びに適正な薬物療法の提供に寄与するべく業務を実施しています。その結果として、薬剤管理指導件数も増加し、全国国立病院機構143施設の中でもトップの実績をここ数年維持しています。



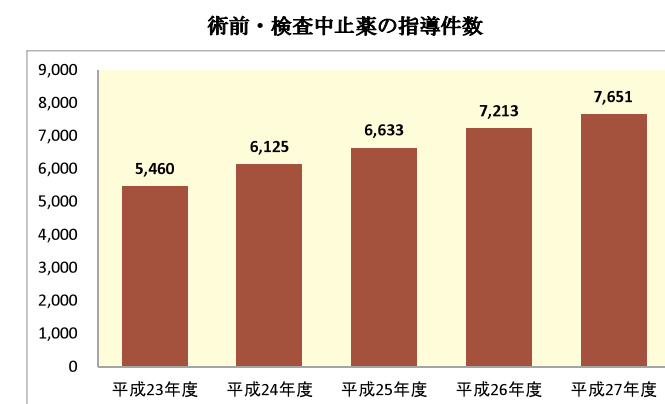
(グラフ①：薬剤管理指導件数の年度推移)

3) 薬剤部の特色

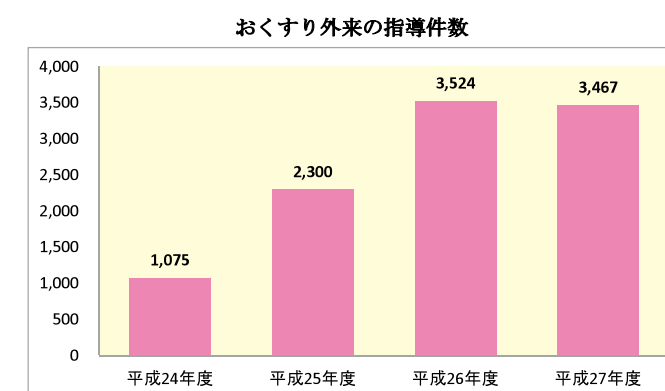
当院では他の施設ではあまり積極的に実施していない薬剤師の活動として、入院患者さんだけでなく、外来患者さんに対してもくすりの説明等を積極的に実施しています。他の多くの施設でも実施している外来化学療法センターにおけるがん化学療法施行患

者さんに対するくすりの説明及び副作用チェックは勿論のこと、平成21年度からは外来患者さんに対して術前・検査時に中止すべき医薬品等の説明を実施することにより、手術・検査の延期や中止を回避するだけでなく、安全な医療の提供に貢献していると考えています。更に、平成24年度からは医師の業務負担軽減とがん化学療法患者さんのQOL向上を目的として、おくすり外来(薬剤師外来)を開設し、外来患者さんの血液検査等の待ち時間を利用して医師の診察前に副作用チェック等の問診を実施し、電子カルテに記録を入力することにより、医師に情報提供を行っています。当初の内服抗がん剤を服用している患者さんだけでなく、医療用麻薬の服用をしている患者さんにも対象範囲を広げています。また、抗HIV薬が院内外来処方された場合にも患者さんが処方箋を薬剤部窓口持参されたタイミングで服薬状況、副作用の確認を目的とした患者指導を実施しています。

今後もチーム医療の一員として、適正な薬物療法が提供できるよう職能を活かした活動を継続して実施していきと考えています。



(グラフ②：術前・検査中止薬の指導件数)



(グラフ③：おくすり外来の指導件数)

職場紹介

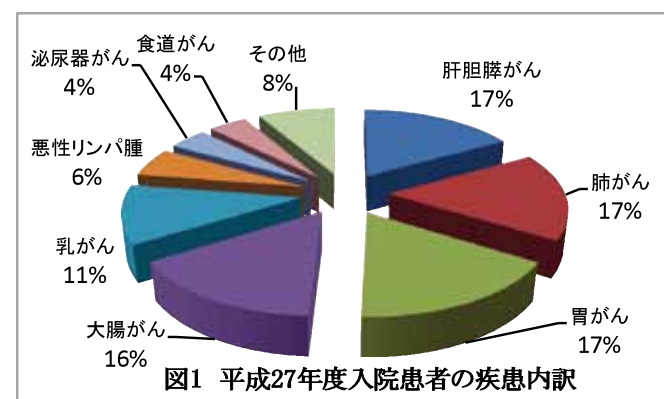
10A（緩和ケア）病棟

看護師長 奥田 真由美



【病棟の概要】

10A病棟は院内病棟型の緩和ケア病棟です。開設されて今年で15年目になります。対象は悪性腫瘍に対する積極的な治療（手術、化学療法、放射線療法など）が難しくなった患者さんです。19床は概ね個室で運用しています。平成27年度に入院された患者さんの疾患内訳を図1に示します。



病棟をより広く知っていただくために、毎週月曜日に院内・院外の患者さんご家族を対象に、緩和ケアについての説明や病棟の案内を行い、相談を受ける「オープンデイ」を開催しています。

【看護の実際】

当病棟は、症状マネジメントを中心に終末期における身体的・精神的・社会的・スピリチュアルケアを目的とした病棟です。薬物療法や指圧、リンパマッサージの実施などにより痛みや呼吸苦、体のだるさなどの症状を緩和し、患者さんに少しでも穏やかに過ごしていただくことを目標にケアを行っています。また、七夕会やクリスマス会など季節の行事に合わせたイベントを開催し、療養生活においてでも季節感や楽しみを感じていただけるようにしています。そして、毎日、緩和ケア科医師・精神科医師・看護師・心理療法士・薬剤師・栄養士・理学療法士・作業療法士がカンファレンスを行い、患者さんご家族の希望に沿えるように、医療チームで取り組んでいます。また、音楽療法士による音楽療法の提供や、ボランティアスタッフによるティーサービス、生け花などにより、患者さんご家族が心穏やかに過ごすことができるよう努めています。



<病棟スタッフ手作りのクリスマスプレゼント>

患者さんご家族へのよりよいケアを目指して看護研究にも取り組み院外の学会で発表しています。平成28年度は以下3題について発表しました。

- ①「鎮静剤に対する患者と家族の思いの相違－1事例から看護を振り返る－」第12回中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会
- ②「嚥下困難のある終末期患者に食事提供を希望する家族の思い」第40回死の臨床研究会年次大会
- ③「終末期患者の耳介部の皮膚トラブル予防に耳枕を使用した看護師の評価－耳枕の使用に関する意識調査より－」第70回国立病院総合医学会

私たち緩和ケア病棟スタッフは、できる限り患者さんの希望に添えるよう、これからも患者さんご家族をお支えする存在であり続けたいと思っております。



職場紹介

看護部長室の紹介

副看護部長 榎 実穂



看護部長室は、看護部に関する全てのことを担っています。

嶋田保美看護部長のもと、副看護部長3名、事務助手1名、メッセンジャー2名がいます。嶋田看護部長は、優しい笑顔、冷静で的確な判断力がある看護部の総司令官です。一端、仕事を離れると一段と明るく、お茶目でチャームな上司です。副看護部長は、業務を総務、業務、教育担当に分けて、それぞれが連携をとりながら仕事をしています。総務担当は管理全般、業務担当は主に労務管理、勤務時間管理等、教育担当は看護師の教育、看護師募集に関すること等を担当しています。現在、業務担当は、温かくて頼りがいのある村田緑副看護部長、教育担当は、男前で爽やか、面倒見がよい梶山ナミ恵副看護部長、総務は、周囲からエレガントで力強い(2人の副看護部長談)と言われている榎実穂です。



そして、看護部の力強い味方として、いつも明るくて元気、パソコンに強く、お料理上手な事務助手の中田亜由美さん、



優しくて誠実な人柄で、周囲に安心感を与える理想的なペアとして仕事をして下さっているメッセンジャーの鳥越美貴さんと、竹内和美さんです。



看護部に関して、お気づきのことがございましたら、ご遠慮なくお聞かせ下さい。管理棟3階にありますので、いつでもお気軽にお立ち寄り下さい。



ストーマ外来の紹介

看護部 皮膚・排泄ケア認定看護師 福田 聖子

ストーマ外来について紹介させていただきます。

みなさんは、ストーマという言葉を知っておられますか。「ストーマ」とは語源はギリシャ語で“口”という意味です。人工肛門・人工膀胱つまり、便や尿を排泄するために腹壁に造られた孔のことです。また、人工肛門や人工膀胱を保有している方を「オストメイト」といいます。当院では年間4回、オストメイトの方々が集い、情報交換を行う「オストメイトサロン」を開催しています。オストメイトサロンは、手術後間もないオストメイトにとって、経験の長いオストメイトからストーマ管理で工夫していることや、困った場合の対処方法などを身近にきける大変有意義な時間となっています。

ストーマ外来には、年間延べ200人あまりの患者さんや、そのご家族が受診されています。相談内容として多いのは、生活面での悩み(食事・睡眠・仕事・スポーツ・趣味・外出・旅行など)に関することや、排泄物の漏れによるストーマ周囲の皮膚トラブルへの対処、ストーマ管理に関する新しい情報(装具類紹介など)や合併症予防に対する情報提供となっています。排泄管理は、生活すべてに直結しています。

私たち皮膚・排泄ケア認定看護師は、患者さんの排泄管理に問題が生じた時、装具交換のタイミングやケア方法の再検討など管理面での工夫や、ストーマおよび周囲皮膚に必要なスキンケアについて一緒に考えること、ケースによれば不安なお気持ちを親身にきくことも重要な役割だと考えています。ストーマを造設される患者さんや、そのご家族が、手術前から入院生活を経て退院されていく過程で、今まで通り安心して生活を送れるような全面的なサポートをしていくという役割を担っています。入院中から退院後(外来)まで継続的に、長いおつきあいをする中で、患者さんそれぞれのご事情を伺いながら、できるだけ希望にそえるような情報提供やケアを心がけています。



＜ストーマ装具＞



【ストーマ外来での様子】
毎週木曜日 13:30～15:00 外科外来4診にて
担当医師:外科医・泌尿器科医

これは、私が入院中に会った患者さんのお話です。

90歳代の女性でストーマを40年前に造設された方です。「装具からの排泄物漏れがずっと悩みでここ数十年外出できていない方がいる」という相談を病棟看護師から受けました。お会いすると、ストーマを造設した当時は装具や皮膚トラブルなどがあっても相談できる場所がなく、とても悩んだとお話されました。私はストーマと腹部をみて排泄物が漏れないような装具を選択し、安心して外出していただけるように支援しました。その結果、「大好きな買い物や近所のお友達と楽しい時間も持てるようになり、とても生活が明るくなりました。ありがとうございます」と笑顔で外来にられました。

このように患者さんの生活を良くすることにやりがいを感じながら、ストーマ外来の担当をさせていただいています。これからも患者さんの気持ちを丁寧にきき、それぞれの問題を確実に解決できるような技術と知識、経験を積んでいきたいと思ひます。



＜実際のストーマ装具＞



「第一回地域医療連携のつどい」開催

地域医療連携部長 中野 喜久雄

昨年10月7日に第一回地域医療連携のつどいが、地域の先生を中心に108名と院内職員の123名とを合わせて231名の方にお集まり頂き、クレイトンベイホテルで盛大に開催されました。

第一部では清水洋祐 連携室長の司会で開会し、谷山清己 院長の挨拶(図1)の後、玉木正治 呉医師会副会長から、お祝いの言葉(図2)を頂きました。

引き続いて当院幹部職員が紹介された(図3)後、檜井孝夫 外科医長が「当院における大腸癌の最新治療とマルチディシプナリー・アプローチ」という演題で講演され、最新の知見と各診療科が良好な連携をとって診療にあたっている現状を紹介して頂きました(図4)。続いて下瀬省二 統括診療部長により、昨年4月以降、新任科長を迎えた診療科を紹介して頂きました。そして、前田修作 内分泌糖尿病内科科長、伊藤琢生 血液内科科長、杉野浩 循環器内科科長、世羅康彦 小児科科長、鬼武美幸 小児外科科長、田代裕尊 外科系診療部長・外科科長、高崎泰一 心臓血管外科科長、岩崎泰昌 救急部部長が、それぞれ各科のセールスポイントを説明して頂きました。

第二部は隣接の部屋へ移り、司会に森下地域医療連携副室長が加わり、先ず地域医療連携職員全員の紹介(図5)があり、続いて森脇克行副院長の乾杯(図6)の後、立食での懇親会が行われました(図7, 8, 9, 10)。途中、舞台のスクリーンには、全診療科がこの日のために作成した診療科紹介のプレゼンテーションスライドが放映され、また病院紹介用のDVDも放映されました。

地域の先生方と直接お会いして、和やかな雰囲気の中で楽しく歓談できたことは、少しでも顔の見える連携に繋がると感じました。また地域の先生方から色々な御要望や激励の言葉を頂き、呉地域での医療連携における当院の責任を痛感しました。さらに今後も地域から信頼される病院を目指して、連携室職員をはじめ全職員が精一杯努力することを再確認しました。

稿を終えるにあたり、裏方で会場の設定、受付ならびに来賓の対応に惜しまない協力をして頂きました事務職、看護部の方に、この場を借りてお礼申し上げます。



図1



図2



図3



図4



図5



図6

地域の先生方と直接お会いして、和やかな雰囲気の中で楽しく歓談できたことは、少しでも顔の見える連携に繋がると感じました。また地域の先生方から色々な御要望や激励の言葉を頂き、呉地域での医療連携における当院の責任を痛感しました。さらに今後も地域から信頼される病院を目指して、連携室職員をはじめ全職員が精一杯努力することを再確認しました。

稿を終えるにあたり、裏方で会場の設定、受付ならびに来賓の対応に惜しまない協力をして頂きました事務職、看護部の方に、この場を借りてお礼申し上げます。



図7



図8



図9



図10



呉医療センター・中国がんセンター 創立60周年記念事業

管理課長 三原 欣也

当センターは、明治22年に創設された旧帝国海軍病院を前身とし、戦後の昭和31（1956）年10月1日に国立呉病院と名を変えて再スタートしました。今年は国立呉病院創立60周年の節目にあたり記念事業として「記念式典・記念祝賀会」と「市民向け講演会」、広島市立大学芸術学部との共同文化事業として「呉医療センター・中国がんセンター芸術賞」選定を行いました。

○創立60周年「記念式典・祝賀会」を平成28年11月26日(土)に呉阪急ホテルで行いました。

記念式典には、主な当院職員、医局OB幹部、楠岡国立病院機構理事長、中川中国四国担当理事などに加えて、平川広島大学病院長などご来賓の臨席を賜り、約70人が参加しました。

式典は、谷山院長の挨拶で開会し、楠岡国立病院機構理事長挨拶の後に安井広島大学大学院医歯薬保健学研究院長、菊間広島県健康福祉局長、原呉市医師会長からの祝辞が述べられました。また木原広島大学副学長からの祝電も披露されました。

特別講演会では、安井広島大学大学院医歯薬保健学研究院長による「広島大学大学院 医歯薬保健学研究院の現在と未来」、そして当院の竹林精神科科長・副臨床研究部長による「呉医療センター臨床研究部の現状及び精神神経科学研究室の紹介」の講演が行われました。

創立60周年記念祝賀会では、平川広島大学病院長や佐治名誉院長などが祝辞を述べると共に当院の発展を祈念しました。

○創立60周年記念講演会～がんと予防と治療の最前線2016～を平成28年11月27日(日)に呉市文化ホールで開催し、約1400名もの市民が来場しました。

谷山院長の挨拶ではじまり、小村呉市長、山本国際ロータリークラブ第2710地区グループ8代表の挨拶が続きました。その後の第1部では、当院医師・看護師による講演を行いました。豊田放射線診断科科長は早期発見の大切さ、河野消化器内科医長は肝がん治療の現状、奥田緩和ケア病棟看護師長は緩和ケア病棟の役割、中野副院長は肺がん全般について講演しました。各講演直後に田代外

科系診療部長によるユーモアたっぷりの解説があり会場からは笑いが起こりました。

第2部では、「癒やしのサウンドブレイク ヴァイオリン・ピアノ演奏」と題した演奏会が行われました。内山優子さんのヴァイオリンと鷺宮美幸さんのピアノがみごとに調和し、美しい生演奏の響きに会場全体が酔いしました。

第3部ではタレント向井亜紀さんが「がんと向き合う」という演題で講演しました。

がんで子宮を摘出した自身のつらい体験から「体の異変に気づいたらすぐに検査を受けて欲しい」と呼びかけ、大変盛り上がった講演会になりました。

○広島市立大学芸術学部との共同文化事業（独立行政法人国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター芸術賞選定）を11月21日から12月9日まで開催しました。
趣旨・目的

- (1) 病院創立60周年事業の一つとして、病院内に芸術に触れる空間を設け、患者やその家族または病院に関わる人々が癒される環境をつくる。
- (2) 地域の文化振興や人的交流に資するため、広島市立大学の教育研究活動を支援し、同大学の卒業生や学生等の若手作家・デザイナーの育成を図る。
- (3) 上記趣旨を受け、広島市立大学と独立行政法人国立病院機構呉医療センター・中国がんセンターが相互発展に寄与することを目的とする。

これらの趣旨・目的から、病院運営方針キーワード「Love&Smiles」をテーマにした芸術作品または院内空間デザインを広島市立大学学内限定公募により募集し、院内展示優秀作品に対して表彰しました。

審査方法は、職員及び一般来院者による投票です。

当院地下1階廊下、憩いの広場及び1階エスカレーターホールに展示した日本画5点、油絵3点、彫刻3点、デザイン工芸5点の作品が展示され、一般来院者の方々にとても好評でした。

この共同文化事業は今後も引き続き毎年行う予定です。

創立60周年「記念式典・祝賀会」



創立60周年記念講演会～がんと予防と治療の最前線2016～



広島市立大学芸術学部との 共同文化事業





2016年メディカルフェスタを終えて

実行委員長 濱田 宜和

「第9回呉医療センター・中国がんセンターメディカルフェスタ2016」を9月24日(土)に開催しました。今回のメインテーマは病院の理念である「相手の心情に寄り添う愛のある医療を笑顔で実践します」に則って『地域で育む 愛ある医療』としました。当日は昨年同様700名を超える来場者でにぎわいました。

9時半の開場と同時にバルーンアートで飾られた正面玄関から来場者が次々と入場され、開会式の行われる外来ロビーはあっという間に満席となりました。午前10時院長の開会宣言で予定通りスタートしました。開会式では和庄小学校4年生児童による澄みきった歌声に来場者・参加職員全員がしばしの間魅了されていました。その後、来場者にはスタッフの誘導のもと各イベント会場に移動していただき、我々の行っている医療を身近に体験していただきました。今回のイベントも昨年のメディカルフェスタ来場者の要望を踏まえ「内視鏡外科手術」の手術手技体験、「膝・股関節痛」の予防体操や「福祉」

コーナーでは実際に盲導犬を連れて歩く体験、また「転倒予防」「脳活」「血圧、血糖や骨密度チェック」などの健康診断を中心に、「バルーンアート」「ヨーヨーつり、パターゴルフ」を加え24のイベントが企画されました。外来フロアに24ものイベント会場が所狭しと配置されましたが、これといった混雑もなく来場者の移動は比較的スムーズであり、どのイベント会場も笑顔が絶えず賑わいを見せていました。技術研修センターで行われた「君こそ天才外科医!! 内視鏡外科手術を体験してみよう!」では女子中学生・高校生約10名がチャレンジ。職員指導の下、楽しそうに内視鏡手術操作を行っていました。10年後が楽しみです。

メインイベントの講演会は4階の研修室で『最新医療』について午前と午後の2部に分け行いました。午前の部では心臓血管外科医高崎泰一が「心臓血管外科」、循環器内科医杉野浩が「心臓病」、消化器内科医山口敏紀が「内視鏡(大腸がん)」について講演し、午後の部では神

経内科医鳥居剛が「脳卒中」、小児科医原圭一が「感染症」、精神科医神垣伸が「認知症」について講演を行いました。講演内容は最新医療の内容であり決して易しい内容ではないにもかかわらず、来場者からの質問が多くあり大変有意義な講演会となりました。参加者数も過去最高であったようです。

講演会の合間に行った「TOMOミニコンサート」では、来場者のみならず職員も、呉市出身のシンガーソングライター「TOMO」の「私の想いを、私の言葉で、私が作るメロディーに乗せた」歌に聞き入っていました。

第9回メディカルフェスタも昨年同様盛会裏に終了しました。約6か月にわたって準備してこられた実行委員、当日は休日にもかかわらず参加いただいた職員、ボランティアの方々に感謝いたします。また当日わざわざご来場いただきました市民の皆様には、多くの感謝並びに心温まる励ましの言葉をいただき誠にありがとうございました。今後も、市民の皆様と呉医療センター・中国がんセンターの職員とのふれあいの場であるメディカルフェスタが継続されることを願っています。





「第3回日本と韓国の医学交流を考える会」が 開催されました

国際交流室 室長 山下 芳典
スタッフ 岸田 直子

当センター国際交流室では、業務の一環として国際イベントのサポートを行っています。今回、10月15日(土)に、呉市医師会が主催した「第3回日本と韓国の医学交流を考える会」(写真1)をサポートしましたので、その様子を報告します。

この会は毎年10月に呉市下蒲刈町で行われる「文化と歴史の祭典 朝鮮通信使再現行列」に会期を合わせ企画されました。再現行列は、江戸時代に朝鮮より江戸幕府に派遣された使節団がこの地を通過する際、当地広島藩を挙げて一行をもてなしたという史実に基づいています。

15日(土)午前、学術会議は当センターにて呉医師会・原会長の開会挨拶で始まりました。座長はKhang教授(韓国ソウル・アサン医療センター)と安井弥教授(広島大)がつとめられ、和やかな雰囲気のもと会は進行しました。基調講演は大上直秀准教授(広島大)とJang教授(韓国ソウル・サムスン医療センター)により、分子病理学的新知見が格調高く講演されました。引き続き、日本から3題、韓国から2題、計5題の口演発表が行われました。発表は、質疑応答も含めてすべて英語で行われました。

その後、参加者は広島市の平和記念公園と呉市下蒲刈町の蘭島閣美術館を訪れ、日本の歴史と文化にふれました。また、蘭島閣美術館ではギャラリーコンサートに招待され、クラシック音楽と共に心地良い時間を愉しみました。

翌16日(日)、参加者は朝鮮通信使再現行列を見学しました。当日は時折小雨が降りましたが、色あざやかな朝鮮の民族衣装が瀬戸内の海と見事なコントラストを描いていました。参加者は、きらびやかな衣装を身に纏った高校生による再現行列を見学した後、見事に装飾された船に乗り(写真2)、往時に思いを馳せつつ行事を堪能しました。

その夜には意見交換会が開催され、参加者たちはより一層親睦を深めました。

この朝鮮通信使再現行列を含む朝鮮通信使関連資料は日韓合同でユネスコ記憶遺産に申請されており、今後の両国の相互理解が深まることが期待されます。

以上の通り、国際交流室では職員の国際活動を支援しています。今後も積極的に活動を広げていきます。



写真2 体験乗船



写真1 日韓の医学交流を考える会 集合写真



第70回国立病院総合医学会に参加して

事務部厚生係 田尾 大樹

平成28年11月11日(金)～12日(土)にかけて、沖縄県宜野湾市で第70回国立病院総合医学会が開催されました。事務部からは植木事務部長、河本経営企画室長、岡垣専門職、西村経営企画係、山田経営企画係、私の6名が参加しました。

本学会は全国の国立病院機構の職員が一同に会していることで非常に活気にあふれていました。医療職の方々は本学会に限らず、各専門学会に日頃より参加されていますが、事務部ではそのような機会がないため、日々の業務への刺激となる貴重な経験となりました。

私は自分の業務に関するQC活動をポスター発表しました。事前に掲示されていたポスターを見学していると質の高い内容が多かったので、自分の発表内容に対して不安が募りましたが、当院の事務部や医療職の方々と会話をすることでその不安も消し去ることができました。万全を期して発表に臨めたことにより、聴講して頂いた方々に内容を十分に伝えることができたと思います。



1日目の夕方からは、ぎのわん海浜公園トロピカルビーチで全員交流会がありました。沖縄らしいエイサーの演舞が行われた後、各種表彰が行われました。当院は意欲的にQC活動に取り組んできた病院として「QC活動奨励表彰10周年記念賞」を受賞し、鳴田看護部長が楠岡理事長よりクリスタルの楯を受け取りました。このような大きな場で当院のQC活動の取り組みが表彰されることは、当院の一員としてQC活動に取り組んできた者として、嬉しく思うと共に今後の活動への励ましとなりました。



他病院事務部の発表を見学した中で、業務効率の向上や経費節減の取り組みなど、当院においても参考にすべき内容は、学会後に当院事務部職員へ伝達しました。各職員が他病院の効果的な取り組みを業務に反映することで、よりよい病院運営に繋がれば良いと思います。

最後に、本学会に参加する機会を与えてくださり、発表に関するご助言・ご指導を頂いた植木事務部長、三原管理課長をはじめとする職員の皆様に心から御礼申し上げます。





接遇研修に参加して

管理課 寺尾 秀二

この度、10月26日に、株式会社エバルスの薮野美由紀先生を招いて接遇研修に参加しました。

今回は「～言葉の伝え方～」をテーマに研修をしていただき、日頃の言動に気をつけることによって相手への伝わり方が全く違うことに改めて気づくことができました。

表情（顔）・態度による相手への感情の伝わり方、会話するときの視線とアイコンタクト、声のトーンや会話のペース・発音を意識した話し方、言葉遣いなどについて研修しました。

隣の参加者とペアとなり話し手と聞き手という設定で研修を行いました。笑顔をつくることから始まり、あいさつについては以前の接遇研修でも教わった「ウスキー」と発音しながら口角を上げ、目尻を下げるという笑顔になることを思いだし、最初は恥ずかしさがありましたがだんだん楽しくなっていました。あいさつをしていく中で笑顔をつくることの大切さを感じました。次にテキストの言葉を尊敬語、謙譲語へ置き換えて会話を行いました。普段あまり意識していないせいか考えさせられる場合が多く日頃から意識することの必要性を痛感



させられました。日常業務の中で使用している言葉も、言葉の意味は同じですが表現の仕方次第で相手への伝わり方の違いに気付かされる場面が多かったので、忙しい時など何気なく言った言葉で相手を傷つけていることもあったのかなと、やわらかい態度を意識することの重要性を実感しました。聞かれたことに対する回答する場面においてもプラス一言添えることにより相手の感じ方が全く違うことがよくわかりました。今回の研修では話し手と聞き手の設定で行うことにより多くのことが実際に体験でき接遇の重要性を感じました。

表情や言葉遣い、態度は自分では客観的に見て感じるができないので日頃から笑顔や柔らかな態度を心掛けることが必要と感じました。今回の接遇研修を生かせるように忙しい日々の中でも定期的に自分の行動を振り返ることで、実践していこうと思います。



患者・環境等サービス委員会 嶋田 保美

～クリスマス・イルミネーション点灯式を開催～

平成28年11月21日(月)17:00 患者・環境等サービス委員会のクリスマス・イルミネーションイベントには、呉附属看護学生による「ハンドベル」＆「クリスマスソング」を企画いたしました。

看護学生によるハンドベルはいつもながら、クリスマスシーズンにはぴったりでした。参加されていた入院患者や多くの職員の心の癒しになったようです。皆、楽しそうにひと時を過ごしていました。



中庭でハンドベルの演奏

今年のイルミネーションの色は、「グリーンとゴールド」を主とし、正面玄関横のイルミネーションの色を変えています。

お気づきになりましたでしょうか？

開催期間は、～12月27日まで点灯していますので、長期間楽しんでいただけたらと思います。



最後に、華を添えていただいた当院の看護学生にお礼をお伝えします。

Arigatou/ gozaimasita



看護学生によるコーラス

医療機器安全ニュース

ME管理室

現代の医療では生命維持や治療に医療機器は不可欠です。これらの医療機器も操作や管理を誤れば重大な事故を招き、死に至るケースさえあります。

ME管理室では、医療事故防止、安全対策の向上を目的とした医療機器安全ニュースを年に2回発行しています。

第13回『経腸栄養ポンプ FE-201』

経腸栄養専用の輸液ポンプFE-201は、3A専用2台と一般病棟用3台で運用していましたが、2016年11月に使用頻度の増加に伴い一般病棟用に2台購入し、全7台となりました。そこで、今回は安全に使用していただくためにこのポンプの特徴と注意点、よく鳴るアラームについて解説します。

【経腸栄養ポンプの目的】

経腸栄養剤は自然滴下でも注入は可能ですが、正確な注入量や低速な注入速度の維持が求められる場合には、経腸栄養ポンプを使用することで、より正確に管理をすることができます。経腸栄養ポンプを用いることで、経腸栄養の合併症である下痢や嘔吐、誤嚥、それに伴う誤嚥性肺炎発症の頻度が低下すると考えられています。

経腸栄養ポンプの適応

- ・下痢の回避（消化管機能低下時や腸痙攣からの経腸栄養時）
- ・嘔吐の回避（消化管運動低下など）
- ・持続投与が必要（腸痙攣など）
- ・手術侵襲の大きい術後の経腸栄養
- ・腸痙攣からの在宅経腸栄養
- ・意識障害や嚥下反射の低下がある

【AFFクリップの注意点】

AFFクリップを移動させるときは、AFFクリップが開いていることを必ず確認してください（図2）。AFFクリップが閉じたまま無理に移動させると、回路を傷つけて破損させてしまう可能性があります。

AFFクリップの解除方法は、AFFクリップに描かれている矢印を図3のように押すと解除されます。

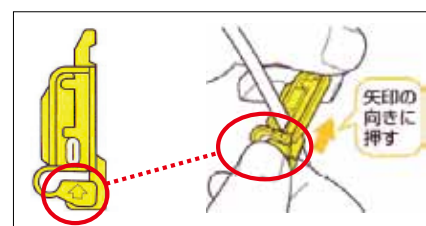


図3. AFFクリップの解除方法



図2. AFFクリップの開閉状態

【閉塞アラーム】

FE-201の閉塞圧は、上流閉塞検出部と下流閉塞検出部の2つで監視しています（図4）。上流閉塞アラームが鳴っている場合は機器よりも上流の閉塞を、下流閉塞アラームが鳴っている場合は機器よりも下流の閉塞を疑うことができます（図5）。どちらの閉塞アラームが鳴っているのかを見ることができ、迅速に対処することができます。

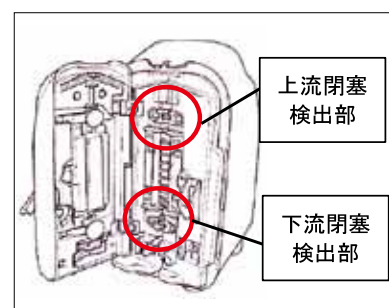


図4. 上/下流閉塞検出部

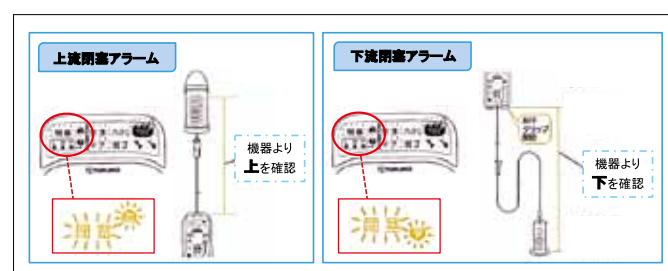


図5. 上/下流閉塞アラーム対処方法

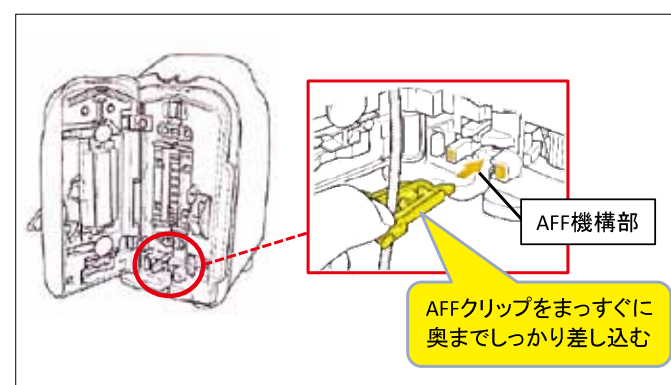


図1. AFF機構部とAFFクリップの装着

うちの部署の接遇キラリさん



臨床研究部
精神神経科学研究室
研究員

岡田 麻美さん

本人のコメント

患者さんに役立つことを目標に、最近増加している気分障害の新しい治療、診断法の開発研究をしています。

職場長からのコメント

臨床研究部 山下 研究部長より
笑顔のあいさつが実に素敵です。精神神経科学研究室をリードされながら、立派に家庭と両立されています。



臨床研修部
研修医

末廣 聡美さん

本人のコメント

患者さんの「治したい」という気持ちを尊重し、信頼関係を築けるよう、日々努力していきたいと思っています。

職場長からのコメント

臨床研修部 水之江 研修部長より
末廣先生はいつも気持ちの良いあいさつをして後輩の良きお手本となっている、笑顔の素敵な先生です。



看護部 4A病棟
助産師

木戸 優子さん

本人のコメント

安心して出産を迎え、退院後の育児を楽しんでもらえるように、思いやりを持った関わりを心掛けています。

職場長からのコメント

4A病棟 石井 看護師長より
いつも笑顔で丁寧に、妊産婦さんや褥婦さんの思いに寄り添うようなケアや指導をされており感謝されています。



看護部 4B病棟
看護補助者

田伏 秋江さん

本人のコメント

患者さんやご家族に少しでも安心していただけるように、笑顔と優しい言葉かけをするよう心がけています。

職場長からのコメント

4B病棟 濱咲 看護師長より
患者さんには優しく丁寧に、看護師にも嫌な顔をせずいつも「神対応」で看護業務を支えて下さっています。



第5期のモデルナースを紹介します。

☆笑顔キラキラ看護師を紹介します。

5A病棟 伊坂 友紀恵

私は、患者さんやご家族・職員に対して笑顔で接することを心がけています。今回選ばれたことで改めて自分の行動を振り返ることが出来ました。まだまだ未熟なことばかりですが、これからはモデルナースとして恥のないよう、手本となるような行動をとっていきたいです。



〈看護師長からのコメント〉

看護師長 徳永 恵子

率先して素敵な笑顔でやさしく患者・家族に接しています。知識・技術もあり、リーダー的な存在で、スタッフ・患者・家族より信頼されています。今後も笑顔や挨拶を続け、モデルナースとして頑張りたいと思います。

6B病棟 吉本 淳美

病棟スタッフ皆、挨拶できていると思いますが、私は、患者さんと家族とのコミュニケーションを図る第一歩として自分から率先して挨拶をしています。日々、忙しいこともありますが、患者さんに忙しさが伝わり遠慮されることのないよう、気持ちを落ち着けて患者さんに接するようにしています。また、患者さんと話す際には、患者さんのペースにあわせ、患者さんが伝えたい思いを受け止められるよう心がけています。



〈看護師長からのコメント〉

看護師長 星野 恵

患者さんに「もっとよい看護をしたい」という熱い思いを持って看護してくれています。日々の看護場面で、さりげなく患者さんへの気配り目配りができるところが素晴らしい。病棟スタッフ皆の良きモデルとしてしっかりと病棟で活躍してくれ、頼もしい存在です。これからの活躍をおおいに期待しています。

6A病棟 松岡 玲華

モデルナースになって、患者さんやスタッフへの対応を改めることができた。患者さんやスタッフ、特に1年生には優しく笑顔で丁寧に対応することを意識している。自ら挨拶をするよう努めて、病棟が明るくなるように心がけている。



〈看護師長からのコメント〉

看護師長 迫井 美帆

いつも、笑顔でハキハキとした対応をしてくれています。周りを明るく元気にしてくれる力があり、病棟のムードメーカーです。

後輩指導も積極的に取り組めており、後輩の成長を願いながら指導をしてくれています。今以上に明るく楽しい病棟になるよう、頑張ってくれることを期待しています。

7B看護師 住田 梨絵

自分自身未熟なところばかりで、慌てることも多く不安ばかりですが、モデルナースとして後輩の手本となるように自分の看護を日々振り返っています。「あすればよかった。」と振り返り、後悔することがありますが、悩んだときは先輩に助けをもらいながら、患者さんにとって何が一番必要なのかを考えて日々看護しています。また、患者さんへの言葉使い・配慮など丁寧に真摯に患者さんと接することを忘れずに取り組んでいます。



〈看護師長からのコメント〉

看護師長 藤田 博子

いつも一生懸命で、労を惜しまず、自分にできることをコツコツ行っています。その志を後輩育成にも有効に活用し、自分らしい看護を展開してほしいと思います。そして、これからも輝いているモデルナースでいることを期待しています。

「秋のオープンスクールを終えて」

看護学校 1年生 前岡 真智華

9月24日に秋のオープンスクールを午前と午後の部に分けて行いました。今回のオープンスクールでは、私達1年生が今までに学んできた手洗いや足浴などの看護技術を、参加していただいた方々に体験していただきました。私達が学んできたことを参加者の方々にお伝えすることは、とても難しかったですが、参加者の方々の笑顔を見て、やりがいを感じる事が出来ました。この経験を生かし、これからの学校生活も頑張っていきたいです。



「メディカルフェスタを終えて」

看護学校 3年生 佐々木 佳美

看護学校は2つのイベントテーマを掲げ、メディカルフェスタに参加させていただきました。

「看護学校はどこなところ？」では、学校紹介として、学校の1年間の行事を紙芝居に見ていただきました。多くの方々に、学校について知っていただくことができました。

「遊んで手作りおもちゃ」では、子どもから大人まで幅広い年代の方が体験してくださいました。子どもさんとお話をしながらおもちゃを作って一緒に遊んだりしました。

今回、メディカルフェスタに参加し、来院していただいた地域の方々と交流させていただく良い機会となりました。



「戴帽式を終えて」

看護学校 1年生 青木 麻里

私は、戴帽式を終えて、改めて自分は看護師になりたいと実感しました。自分たちで考えた“誓いの言葉”に述べたような看護師になるために、日々の学習で専門的な知識、看護の技術（わざ）を身につけていきたいと思います。また、クラスメイトや先輩、先生方と関わる中で、コミュニケーション技術を磨き、患者さんとの信頼関係を築く力も身につけていきたいと思います。

保護者や先輩方に見守られながら先生方に戴いたナー

スキャップ（男子学生はワッペン）を大切に、1年生54回生の決意を胸にこれからも勉学に励んでいきたいと思います。





医療法人社団 生康会 谷本医院

院長 谷本 光生

当院は、JR吉浦駅から徒歩約2分に位置し、高血圧、糖尿病といった生活習慣病を中心に、地域の「かかりつけ医」としてプライマリ・ケアを行っております。

プライマリ・ケアとは、緊急の場合の対応から、健康診断の結果についての相談まで幅広く行う医療のことです。プライマリ・ケアを行う医師（総合医）は、そのための専門的なトレーニングを受けており、患者様の抱える様々な問題にいつでも幅広く対処できる能力を身につけている「何でも診る専門医」です。必要ときには、最適の専門医に紹介します。在宅診療や地域の保健・予防など、住民の健康を守る役目も担っています（広島大学病院総合内科・総合診療科のホームページより引用）。

当院では、患者様に質の高い医療を提供したいという理念に基づき、医師・スタッフともに日々研鑽しております。院長は、日本成人病（生活習慣病）学会認定管理指導医、日本プライマリ・ケア連合学会認定医/指導医をはじめとした様々な関連資格を有し、スタッフも生活習慣病療養指導、透析看護、在宅看護、緩和ケア、介護支援など多岐にわたる研修を行い、患者様に還元できるよう努めております。

近年の医療の進歩は目覚ましく、幅広い疾患に対応していくためには、病診連携（病院と診療所の連携）が大切であることはいまでもありません。呉医療センターの皆様には、緊急時の対応や専門科への紹介など平素より大変お世話になっております。病診連携を行ううえで、「呉医療センター地域医療連携ネットワーク（略称：波と風ネット）」は、患者様の負担がなく、セキュリティ対策も安心でき、診療所にとって大変有用なサービスであるため、当院でも重宝させていただいております。

「波と風ネット」は、今この原稿をお読み下さっている方にも是非お勧めしたいサービスですので、少し詳しく説明させていただきます。このサービスは、かかりつけ医でも診療を希望される患者様の同意のもとに、呉医療センターで行われた検査結果や処方、入院経過などの情報が、インターネットを通じて迅速かつ詳細にかかりつけ医に提供されるサービスです。例えば、呉医療センターに入院し、退院後にかかりつけ医を受診した場合、かかりつけ医の先生は従来の紹介状に加えて入院中の情報も得ることができるので、患者様がより質の高い診療を受けることができるようになります。また、呉医療センターを受診した同日にかかりつけ医を受診した場合、その日の呉医療センターでの診療情報を直ちに得ることができるので、患者様が日を改めてかかりつけ医を受診する必要がなくなります。その他に、かかりつけ医が呉医療センターでの検査予約をすることができるなどの利点もあります。患者様は、説明を受けて同意していただくこと以外に面倒な手続きがなく、費用負担もありません。実際に当院で利用されている患者様にも好評を博しています。

今回、病診連携の話が主となってしまう、当院の紹介が十分

ではないかもしれませんが、しかし、病診連携とはそれだけ重要であり、患者様にとって有益であると当院は考えております。引き続き患者様の適切な情報提供に努めて参りますので、今後ともよろしくお願い申し上げます。



資格・所属学会など

<資格>

順天堂大学非常勤講師 医学博士（甲）／日本内科学会認定内科医／日本成人病（生活習慣病）学会認定管理指導医／日本プライマリ・ケア連合学会認定医／日本プライマリ・ケア連合学会指導医／日本高血圧学会専門医／日本糖尿病協会療養指導医／日本透析医学会専門医／日本グリーフケア協会グリーフケアアドバイザー／日本医師会認定産業医／認知症サポート医／厚生労働省在宅医療推進医／厚生労働省重篤副作用総合対策委員（2007～2010年度）／身体障害者福祉法指定医／呉市地域保健対策協議会在宅医療検討委員（天応・吉浦地域委員長）／BioMed Research International (Editor of Endocrinology) など

<所属学会>

日本内科学会／日本成人病（生活習慣病）学会／日本プライマリ・ケア連合学会／日本高血圧学会／日本糖尿病学会／日本糖尿病協会／日本糖尿病性腎症研究会／日本腎臓学会／日本透析医学会／日本在宅医学会／日本リハビリテーション医学会／日本グリーフケア協会 など

内科／生活習慣病の相談・往診・訪問診療
予防接種（インフルエンザ等）・各種検診

送迎有

診療時間	月	火	水	木	金	土	
						第1・3・5	第2・4
9:00～12:30	○	○	○	○	○	○	休
15:00～18:30	○	○	○	休	○	休	

【休診日】日・祝日、木曜午後、第2・4土曜日、第1・3・5の土曜日午後



医療法人社団 生康会 谷本医院

〒737-0863 呉市吉浦宮花町7-11

ホームページ <http://tanimotoiin.com/>

TEL：0823-31-1123 FAX：0823-31-1120

呉医療センターへご寄付をいただきました。

7/1～9/30の間にご寄付を高野 晴子様、佐々木 邦芳様、呉市医師会様からいただきました。

当院において患者さんのために使用させて戴きます。ありがとうございました。

編集後記

昨年4月、呉市は旧軍港四市の一つとして文化庁の「日本遺産」に認定、その歴史的魅力が国内はもとより海外にも発信され、地域の活性化に勢いが増してきています。当院は10月に設立60周年を迎え記念事業として「記念講演会～がんと予防と治療の最前線2016～」や「記念式典・祝賀会」が開催されました（P16-17）。前身の呉海軍病院の設立から127年目となり、1世紀以上地域の皆様とともに歩んでまいりました。それをさらに強化するために9月に「メディカルフェスタ」（P18-19）、10月に「第一回地域医療連携のつどい」（P15）が開催されました。学術面でも「韓国との医学交流」「国立病院総合医学会」（P20～）と、最先端医療を実践しています。これから益々元気になってくる地域の皆様を、健康・医療面でバックアップしていきたいと思っております。本年も何卒よろしくお願い致します。（編集員 H.T.）